



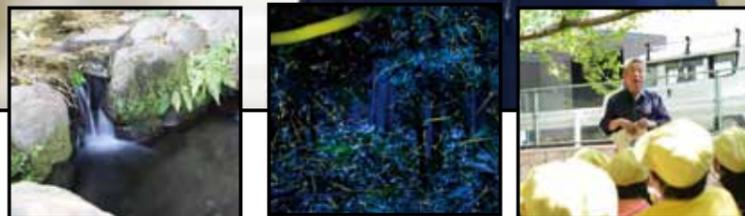
「こぶしの水き、 ぶっぴきれいなままだ。」

とふと思ひ竹間沢ほたる育成会の会長で、じいちゃん、と唯莉さんが呼ぶ祖父の貞之さんに、ふるさとのことを聞きました。

「昔の竹間沢東地区は田園が広がり夏にホタルが舞い、そのホタルの光を今の子どもたちに見せたいからと、じいちゃんが育成会を立ち上げ、町で唯一湧き水のあるこぶしの里を清掃してホタルを飛ばそうと思ったことを教えてくれました。」

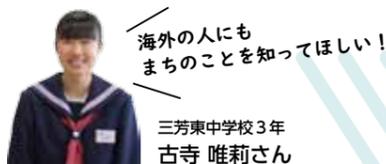
今では想像できませんが、ゴミが散乱していたこぶしの里。それを救ったのは育成会と知った唯莉さんは、感謝の想いの中で、ゴミを捨てる人たちの心情を交差させます。

「大好きなこぶしの里にゴミが大量に放置されていたと知り、心が締め付けられました。きっと放置した人は「一つくらい」「これくらいなら」「ほかにも捨てている人がいるから」と簡単な思いから捨てたのだと思います」と語気を強め「一人ひとりの安易な考えの積み重ねで、2トング3台分のゴミになってしまいました」と寂しそうに話します。



将来、ホタルが自生できる そんな町になっていたい。

都会からそれほど離れていないにも関わらずホタルが観られる三芳町。なぜ、きれいな水がこぶしの里に流れているのか。その裏側に迫ります。



海外の人にも
まちのことを知ってほしい！

三芳東中学校3年
古寺 唯莉さん

大好きな三芳町

昨年行われた青少年の主張（中学の部）で優秀賞を受賞した古寺さん。作文では、自然豊かなふるさと三芳町への想いを、こぶしの里でなぜホタルが舞うのかなどの視点で書いています。

「じいちゃん、凄くなって。ちよっと照れくさそうに話す古寺唯莉さん。その表情から祖父の古寺貞之さんの笑顔が重なります——。

今から13年前、竹間沢小学校4年生の児童がホタルの幼虫をこぶしの里に放流を始めました。毎年5月から6月にかけて、夜空を幻想的な光で照らすホタル。子どもたちの想いを乗せたホタルを観ようと、町内外からたくさんの方が押し寄せます。

自然豊かなこぶしの里ですが、昔はゴミが放置され、こぶしの里の脇を流れる「こぶしの川」などの水質はお世辞にもきれいとは言い難いものでした。

「こぶしの里の水、昔は澄んでいてとてもきれいだったそうです。それを取り戻すために15年ほど前に清掃を行ったところ、2トング3台分のゴミが回収され、ゴミの中にはタイヤ、自転車、建築現場の廃材などがあつたそうです」と教えてくれたのは、三芳東中学校に通う古寺唯莉さん。

唯莉さんは学校に提出する作文で「三芳町のことを書きたい」



自然豊かできれいな 「こぶしの里」を守り続ける

一方で「一人ひとりの小さな思いも数が増えることで、大きなチカラになる」と唯莉さんは感じるようになりました。

「三芳町は自然が豊かというイメージがありますが、じいちゃんのように自然を保護する人、ふるさとを守りたいと思う一人ひとりの思いが積み重なり、自然を楽しむ恩恵を受けられるんだなって」。

「実は——」と申し訳なさそうに言う唯莉さん。「じいちゃんに話を聞くまでは、大きなショッピングモールがある他のまちが羨ましいって思っていました。でも三芳町は優しい人が多くて自然が豊か。野菜も美味しい。一人ひとりの想いの積み

一人ひとりのオモイデヒカル

竹間沢ほたる育成会



田園地帯が広がり、夏はホタルの光を楽しむ。子どものころに体験したふるさと三芳町の思い出を今の子どもたちにも伝えていきたいと、平成14年に竹間沢ほたる育成会が結成されました。こぶしの里の清掃のほか、竹間沢小学校の児童にホタルの幼虫をこぶしの里に放流することも行っています。

竹間沢ほたる育成会会長
古寺 貞之 さん



約40年前のこぶしの里。当時の子どもたちの遊び場でした。

「町のことを思っていて行動できるじいちゃんは凄くなって。私も一人ひとりの町への思いを集めて、ホタルが自生できるきれいな水のあるオアシスのような町にしていきたいです。」